

創刊昭和55年5月5日

発行所 まんいちほち
418こちら情報部
 〒418-0063
 富士宮市若宮町140(きうちいんさつ内)
 TEL 0544 24-1515
 E-mail: printkiuchi@space.ocn.ne.jp

印刷所 株式会社 **きうちいんさつ**

第**394**号
 【通巻395号】

次号は 4月5日の発行です。
 発行数15,500部

こちら情報部
 yon.ichi.hachi.

ばたに小さな春、
 花咲く春はもうすぐです。



内藤修次(西町)

現代を知る ⑫

旅と観音様

立春から一週間後、妻の友人達と南房総の館山へと旅に出た。花あり、海あり、魚介などの食事、夜の語り、全て幸せの渦中で心身共に酔い続けた。翌日、昼食後、観光地らしくない通称崖の観音へと行く事にした。急な階段を上り、歩くこと約一〇分後、やっと、目的の頂上に着いた。まず、観音様にお祈りだ。まさに崖に張り付くように、薄暗い格子戸の中にいらっしやっ

た。覗くように手を合わせたり。振り返り、お堂を出ると、清水の舞台のような横一五m、前三m位の広さの場所へと歩み出た。下は絶壁、前方には太陽に湾が光り輝いていた。まさに絶景だった。しかし、不思議なことに孫の顔が浮かんできた。幸せになれよと、心の中でつぶやく自分がいた。周囲を見ると、同世代の方々が沢山、海をじつと眺めていた。その横顔には、未来

を祈っているかのような表情があった。背にしている観音様が我々を見守ってくれているのだろうか。みんな幸せに満ちあふれていた。下界では、少子高齢化の日本があえぎ始めているが、この舞台は、高齢者の人たちの休憩の地となっていた。帰り、下界へ下り、観音様を見上げ「日本をよろしく」と頭を下げた。

望月 勝

梅

くらしの中の言葉から ⑪

今年は何年よりも寒さが厳しい日が多く、北海道や東北地方からは、観測史上最大の積雪となった地域のニューズも聞かれました。そうはいっても、日差しや風などは、だんだんと春のきざしが感じられるようになり、チューリップの球根からは、しっかりとした葉と茎が伸びてきました。やはり「梅は咲いた

か 桜はまだかいな」という歌がありました。春を待ちわびる気持ちは、今も昔も変わらないのでしょうか。梅といえば「東風(こち)吹かば にはいをこせよ 梅の花 主なしとて 春な忘れそ」という歌が有名ですが、これは菅原道真が京から福岡の大宰府に左遷される折に、京の自宅に残していく、庭の梅に対して詠んだもの。そして、この梅が主人を追って、一夜のうち大宰府まで飛んだという「飛梅」の伝説も有名です。道真が左遷されたのは旧暦の一月二十五日。今年の暦では三月六日に当たります。ちょうど今の時期、ほのかな梅の香りのなか、道真は長い別れを惜しんでいたのでしょうか。

萬歳

東京タワー

マンズリーエッセイ 232

千葉に住んでいる次女を訪ねるために、ここ数年頻りに首都高速を利用するようになった。その度に東京タワーの近くを通過するのだが、何度見ても美しい塔だと思ふ。(特に、夜ライトアップされた姿は本当に綺麗である)。建設された当初はエッフェル塔の物真似だと酷評されたそうだが、今でもその機能美は決して失われていない。現在はその業務のほとんどをスカイツリーに譲ってしまったが、私にはただの電波

塔以上の存在である。昔、小学校の修学旅行で東京タワーに行き、友人と中で迷ってしまい、集合時間に遅れて担任にこっぴどく叱られた思い出がある。先日も女房とそこを訪れる機会があったが、何故か小学生当時のように緊張してしまつた。展望台から見える風景は昔とは大きく変わった。肩が何処かにかかっている友人が何処かへ行ってしまった。角田猛夫

伝言板

静岡県立 朝霧野外活動センター

「プラネタリウム一般開放 ~なに色のほしがすき?~」

日時: 17日
 1部 13:15~受付
 13:30~14:30上映
 2部 15:00~受付
 15:15~16:15上映

「スケートフェスティバル」
 今シーズン滑りおさめ!
 日時: 31日 開催決定

詳細は後日センターHPにて発表いたします。
 TEL: 0544-52-0321
 HP: <http://asagiri.camping.or.jp/index.html>

水五訓

寒さもようやくゆるんだ水辺に立っていると、何となくあたたまってきた感じがする。「水温む」は春の季語。「水底に映れる影もぬるむなり」(杉田久女) また、底にひそんでいた魚も動きはじめ、水草も生えてくなど、春の動静が辺りを明るくして彩りを添える。「鯉ゆけば岸は明るく水温む」(山口青邨) 『成語林』によると、――「水広げれば魚大なり」(水が広くたくさんある所に住む魚は大きいということから) よい所からはりっぱな人が出る。また、すぐれた人の下には、りっぱな人が集まるといったとえ。

さて、「水」をネットでひるい、「水五訓」を検索したところ――戦国時代、豊臣秀吉の智恵袋といわれた黒田官兵衛(黒田如水)の教え。

- 一、自ら活動して他を動かすは水なり
- 二、常に己の進路を求めて止まざるは水なり
- 三、障害にあい激しくその勢力を百倍し得るは水なり
- 四、自ら潔うして他の汚れを洗い清濁併せ容るるは水なり
- 五、洋々として大洋を充たし発しては蒸気となり雲となり雨となり雪と変じ霰と化し凝しては玲瓏たる鏡となりたえるも其性を失はざるは水なり

とりわけ、第五条の伝えたいことは、「常に自然の理(ことわり)にそって物事を考えよ」ということ。水は温度の変化、器の形によって次々と自らの形を変えます。しかし、その本質は一切変化することがありません。

一方、水五訓は水五則ともいわれ、いみじくも「水」の部分を「人」に置き換えても意味の通じる教訓となります。もとより、「水は逆様に流れず」――水は低きに從って流れ、決して高きを望まず、自然のなりゆきに任せて、低い方へ低い方へと流れる。

春川の音に聞き入る水車

KEN

